

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT
2026
Summer

人と人が出会い、世界がつながる
ピースボートクルーズの魅力



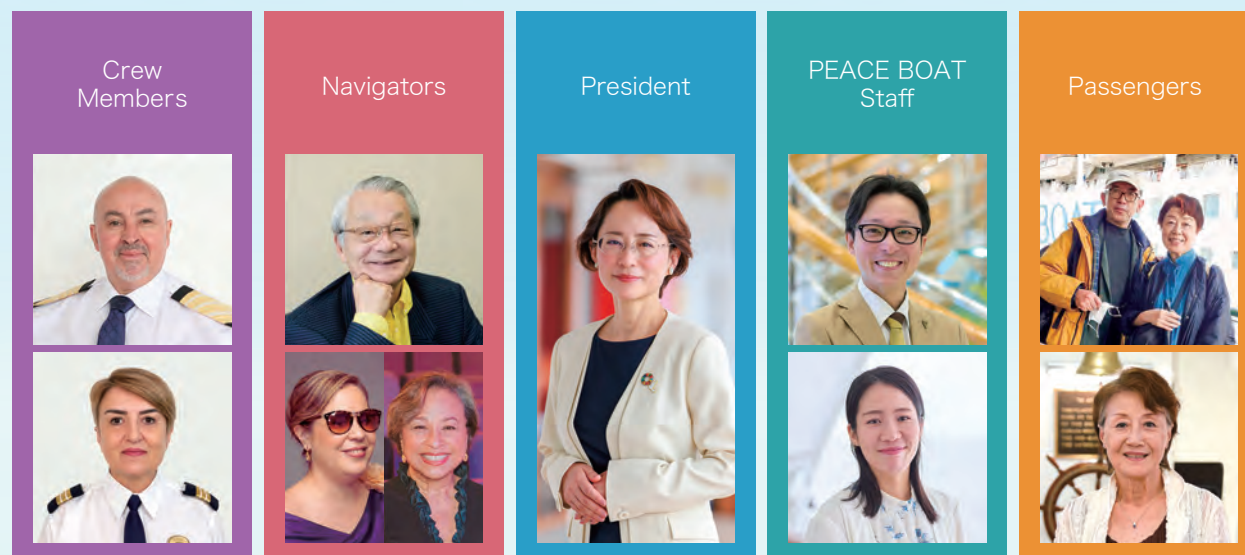
第二特集 世界一周の食卓を支える舞台裏

[発行] (株)ジャパングレイス

出会い、ふれあい、発見が続く

感動に満ちた 世界一周の旅へ

世界一周の旅で出会うのは、美しい景色や世界遺産、初めて触れる文化や食
だけではありません。船上で語り合う仲間との時間、そして新しい自分との出
会いも大きな魅力です。日々の暮らしでは味わえない発見や感動が積み重なり、
やがて人生を彩るかけがえのない思い出になっていきます。この旅が多くの
人を魅了する理由を、さまざまな立場の声からひも解いていきます。



The appeal of Peace Boat

GLOBAL VOYAGE
2026 Summer

CONTENTS

特集

出会い、ふれあい、発見が続く

感動に満ちた P3
世界一周の旅へ

旅が平和をつくり、
平和が旅を可能にする P4

乗船スタッフから見た
ピースボートクルーズ P6

水先案内人から見た
ピースボートクルーズ P7

乗船経験者から見た
ピースボートクルーズ P8

本船乗組員から見た
ピースボートクルーズ P9

ピースボートスタッフが選ぶ
世界の絶景10選 P10

第二特集

世界一周の
食卓を支える舞台裏 P12

PEACE BOAT ACTIVITIES P16

PEACE BOAT SPECIAL TALK P18



旅が平和をつくり、 平和が旅を可能にする

一人の参加者として乗船した船旅が、やがて人生の航路を大きく変えていく。株式会社ジャパングレイスの井筒社長とピースボートとの出会いは30年以上前にさかのぼります。世界各地を巡り、多くの人と出会い、新たな価値観に触れてきた経験は、現在のクルーズ運営にも息づいています。旅を通じて人とつながり、世界を知り、自分自身を見つめ直す。そんなピースボートならではの魅力と、これからの船旅への思いを語ってもらいました。

株式会社ジャパングレイス
代表取締役社長
井筒 陽子 IZUTSU Yoko

大学4年時にピースボートと出会い、卒業後にジャパングレイス入社。営業部長、取締役を歴任し、長年にわたり現場からクルーズ運営を支える。MSC認証水産物の導入をはじめとする海洋保護などのサステナブルな取り組みを推進し、2026年に代表取締役社長に就任。持続可能で心豊かな船旅の未来をめざす。



■人生を変えた最初の乗船
私が初めてピースボートに乗船したのは1993年の夏でした。当時は就職活動中の学生で、きっかけは新聞記事でした。「さまざまな人との出会い」「視野を広げる旅」という言葉に惹かれたのを今でも覚えています。「みんなが主役で船を出す」というプロジェクトに携わる経験はとても刺激的でした。また、ピースボートクルーズの船内では、自由闊達に議論が交わされ、新しい企画が生み出されていくことにも驚きました。船旅には飛行機の旅とは違う魅力があります。港へ近づいたときに、その土地の空気や匂い、人々の暮らしを感じる事ができます。寄港地で出会った人たちとの別れや、新たな世界へ向けて出港する瞬間の高揚感は、今でも私の心に深く残っています。

■新たな役割と変わらない思い

今年、私はジャパングレイスの社長に就任しました。責任の重さを感じる場面もありますが、それ以上に実感しているのは、多くのお客さまやスタッフ、関係者の皆さまに支えられ

への投資であり、新しい一歩を踏み出すきっかけでもあります。人生は何

歳からでも新しい出会いがあります。何歳からでも新しい挑戦ができ、そして何歳からでも更新できる。この世界一周クルーズが、皆さまにとって新しい出会いと発見に満ちた旅になることを願っています。最後になりますが、累計乗客数10万人という節目を迎えられましたこと、この誌面をお借りしまして改めて深く感謝申し上げます。

株式会社ジャパングレイス
代表取締役社長 井筒陽子

ているということです。ジャパングレイスが大切にしてきた「旅が平和をつくり、平和が旅を可能にする」という理念は、これからも変わることはありません。一方で、世界情勢が大きく変化する中、旅行会社に求められる役割も広がっていると感じています。私たちはお客さまを目的地へお連れするだけではなく、その土地の歴史や文化、人々の暮らし、社会課題に触れ、考えるきっかけを提供する存在でありたいと思っています。その姿勢は、船内の暮らしや環境への配慮にも直結しています。美しい海を守るため、船内でのペットボトル販売を廃止し、船員へはオリジナルの水筒を配布してプラスチック削減を推進しています。こうした小さな選択の積み重ねが、持続可能な未来をつくと信じています。

■ピースボートとともに果たしていく使命

NGOピースボートとジャパングレイスは役割が異なります。ピースボートは魅力的なクルーズを企画演出し、船会社は安全な航海を担っています。私たちはその中間に立ち、両者の調整役としてクルーズを運営しています。アジアからのお客さまも増え、ビザの手続きなどから国と国との関係を考えさせられる機会も多くなっています。今後は旅行会社としても主体的にメッセージを発信していく必要性を感じています。たとえばピースボートの船体にはSDGsやICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のロゴが描かれています。それは私たちが大切にしている理念の象徴でもあります。

■人生は何歳からでも更新できる

近年のクルーズでは、仕事や子育てがひと段落した世代の方々とお会いする機会が増えています。「いつか世界一周を試みたかった」「新しいことに挑戦したい」。そんな思いを胸に乗船される方も少なくありません。実際に船内では、多くの方が人生で初めてのことに挑戦されています。年齢に関係なく、新しい趣味や学びに目を輝かせる瞬間。日を追うごとにイキイキとした表情へと変わっていく姿を、私は何度も見えました。クルーズは一過性の旅行ではなく、自分自身



おかげさまで累計乗客数10万人



2026年4月、Voyage123クルーズにて累計乗客数10万人を突破。これまでに100回を超えるクルーズを実施し、200以上の港を訪問。出航当日はパシフィック・ワールド号の船上で、華やかな記念式典を開催しました。

100日間、毎日楽しい船内企画が満載です

20年以上ピースボートに乗船していますが、毎回素晴らしいと思うのは参加者自身が実施する「自主企画」です。自分の趣味などを活かした個性的な企画は、毎日20個以上催されています。またぜひ体験していただきたいのは「芸達者祭」。その名の通り参加者がステージ上に次々登壇し特技などを披露するもので、オーディエンスとしても登壇者としても楽しめます。近年は日本以外からの参加者も多くなり、100日間毎日国際交流を体感できます。言葉の壁を越えて仲を深めた人同士で、練習



を重ねて発表会に参加することも多いのですが、これは、この船ならではの光景でしょう。この交流は下船後も続くもので、私自身も台湾やシンガポールに行くとき必ず会いに行く友人がいます。100日間の船旅はお楽しみが満載です。

「県人会」をはじめ工夫を凝らした企画を開催しています

毎回定番の船内イベントとして「県人会」があります。これを開催すると、初対面同士でも共通の話題で盛り上がり、一気に距離が縮まり打ち解けます。そして一緒に食事をしよう、飲みに行こうとなつて、ほかの船内イベントを楽しんだり、寄港地で行動を共にすることもあります。船内での濃密なコミュニケーションを通じて、世代を超えた深い絆が自然と生まれるのがピースボートの特徴です。私たちは「絶対に楽しい旅をつくる」とい

う気持ちをもつて参加者の皆さまにいきなり笑顔になつてもらうかを常に考え、工夫をしています。「県人会」はその一例です。私は参加してくださる皆さまに感謝し、一期一会の出会いをかがえのないものとして、最高の時間を過ごしてもらえよう毎回奮闘しています。大変なことがあつてもいつもクルーズの最後は「楽しかった！」と思え、私自身がまた乗りたくなる、それがピースボートクルーズです。



クルーズディレクター 鈴木 隆之 SUZUKI Takayuki

自転車で日本一周1万キロを完走。世界一周クルーズには15回乗船し85ヶ国を巡る。趣味はサルサと受験で、コロナ禍には6つの国家資格を取得。



乗船スタッフから見た ピースボートクルーズ

船の上で過ごす時間が旅を豊かにする。それがピースボートクルーズの大きな魅力です。他社とは一線を画す「ユニークで充実した船内生活」には、一体何があるのでしょうか。多彩なイベントや乗客同士の深い交流など、単なる移動を超えて毎日が特別になる理由を、乗船スタッフの二人が語ります。



ピースボートスタッフ 渡邊 さゆり WATANABE Sayuri

中高の不登校を経て、自分を変えるべく世界一周の船旅へ。帰国後スタッフとなり、陸では全国での説明会、乗船時はカルチャースクールやメディア部門で船内を支える。

弁護士 河合 弘之 KAWAI Hiroyuki

東大法卒、弁護士。東電株主代表訴訟で13兆円超の賠償命令を勝ち取るなど原発差止訴訟を牽引。残留日本人の国籍取得や、脱原発を題材とした映画監督としても活躍。



水先案内人から見た ピースボートクルーズ

世界各地のさまざまな業界で活躍する水先案内人との出会い、交流は、ピースボートクルーズならではの魅力です。講演やステージを通して、その人の人生や経験、世界への思いに触れる時間は、旅をより深く、より豊かなものへと導いてくれます。



歌手、ピアニスト、作曲家 パトリシア・ブリエグ Patricia VLIEG

パークリー音大卒。パナマ出身の音楽家。クインシー・ジョーンズ賞を受賞し、音楽を通じた異文化理解や平和構築に尽力。



音楽療法士、クラシックギタリスト ヴィルマ・エスキベル Vilma ESQUIVEL

パナマ出身の研究者。国内の音楽療法協会の創設者であり、30年以上国連機関と社会変革に尽力。アートによるアプローチで新たな平和構築の形を追求する。

人生の思い出作りに最高のプラットフォーム

ピースボートは1983年、若い人を中心に世界の人々と交流するために発足されましたが、そのコンセプトは今も輝きを放っています。40年の歳月の流れで、参加者の中心はシニア層に移りつつありますが、それはそれで微笑ましい。真面目に人生を送ってきたご褒美に、ただの観光旅行ではなくて自分たちの生きてきた地球はどんな星なのか、という観点から人生を振り返る旅ができるのは素晴らしいと思います。私は子どもや孫に残すお金があったらピースボートに乗っちゃいなさい、と言いたい。人生で大事なのは思い



出です。その思い出作りにピースボートは最高のプラットフォームです。またピースボートは社会にとって有意義な事業を行っている国際NGOであり、皆さんが乗船することとピースボートの活動をサポートすることにもつながります。そしてまた私も社会貢献できる喜びをもつて、水先案内人を務めています。

国境、言語を越えて平和を構築する

ピースボートの洋上で私たちは2つのコンサートを行いました。一つは「対話への架け橋」として英語、フランス語、日本語、スペイン語、中国語の楽曲を通じて出会い、発見、平和への願い、そして感謝というテーマを探索しました。もう一つの「パナマから愛を込めて」ではベネズエラ出身の弦楽四重奏団と共演し故郷の音楽をお届けしました。まず準備の段階でアートを通じスタッフ、共演者、プロデューサーたちとの協働

がありました。そしてコンサートでは多言語の通訳が用意されていたこともあり、国境を越えて多くの方と心でつながることができました。まさにこれがピースボートの平和の構築です。共通の人間性を認め合うことが、私たちが共有する地球と未来を守る道であることをピースボートは改めて認識させてくれます。



私たちが何より大切にしているのは、『マニュアルではない』心のおもてなし』。100日を超える世界一周クルーズは、数日間の旅とは違います。長い時間を共にするからこそ、私たちは皆さまを大切な家族のように迎え入れます。また、当船ならではの魅力として、各寄港地ごとに世界的な要人が訪れることが挙げられます。例えば、ニューヨークでは国連職員や、各国の大使など多数のゲストが来船しました。国連に「SDGsキャンペーンシップ」として認定され、特別協議資格を持つピースボートだからこそ実現できる唯一無二の光景であり、このような機会は他の客船で



経験できることではありません。これまで多くの客船でキャリアを積んできましたが、ピースボートは本当に特別です。若い世代も多く、船内は活気にあふれています。この温かく刺激的な洋上ホテルで、皆さまと豊かな時間を分かち合える日を、心から楽しみにしています。

国際色豊かな出会いがあふれる、特別な場所



ホテルマネージャー
ジョージ・ソウザ
George SOUSA

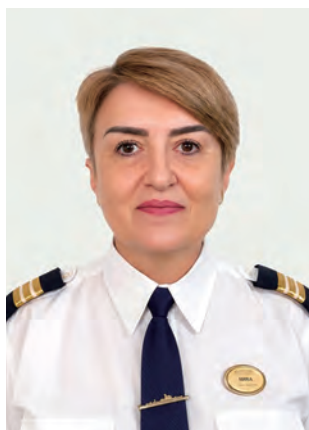
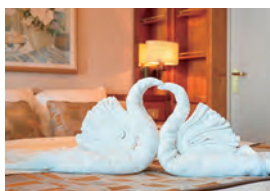
プリンセスクルーズやシルバークルーなど国際的客船勤務を経て、現在はパシフィック・ワールド号ホテル部総支配人として船内を統括。

本船乗組員から見た ピースボートクルーズ

乗客の一番近くで船旅を支える乗組員。彼らの目から、ピースボートはどう映っているのでしょうか。船内の快適な空間とおもてなしを統括する二人が、この船旅ならではの魅力を語ります。

私たちの使命は
お客さまが毎日
心からくつろぎ、
「ただいま」と何度も戻りたくなる
環境を創り出すことです。手すりの真鍮を細部まで磨き上げるのは、観光から戻られたお客さまを「やっと我が家に帰ってきた」とホッとする空間でお迎えしたいからです。船室はお客さまのプライベートな聖域。朝ゆつくり休みたい時の臨機応変な対応など、言葉にされる前にニーズを察知し、一人ひとりに寄り添います。そうして一番近い存在として寄り添うなかで、船上では魔法のようなことが起こります。「いつも本当にありがとう」と

お客さまが乗組員を心から気遣ってくださる、そんな温かい交流が多く生まれるのです。この互いに感謝し合う心の触れ合いがピースボートクルーズの特徴であり、毎年多くの方が私たちの元へ戻ってきてくださる理由の一つだと思います。「またお会いできて嬉しいです！」と語り合う、その幸せな瞬間こそ私たちの最大の喜びがあります。



エグゼクティブチーフハウスキーパー
マリア・ネリ・ザムフィール
Maria Neli ZAMFIR

RCCLやカーニバルなど、客船勤務30年の経験を持ち、上級管理職を歴任。現在はパシフィック・ワールド号客室部門全体の指揮を執る。

「ただいま」と何度も帰りたくなる船

乗船経験者から見た ピースボートクルーズ

ピースボートクルーズの乗船経験者は世界でどのような感動を味わい、出会いを重ねているのでしょうか。実際に乗船した方々が、心に残る体験を紹介します。



平井葉子さん

約30年にわたりピースボートクルーズに乗船してきたので、もう人生の一部と言っても過言ではありません。

人生を豊かに変える、 出会いと体験があります

1997年、子育てが一段落した後、東南アジアをまわる3週間のピースボートクルーズに一人で乗船しました。その素晴らしさに感動し、翌年に念願の世界一周の旅へ出ました。印象的だったキューバの首都ハバナ、バルセロナのシーフードの味、アンコールワットの遺跡巡りなどを満喫。ピースボートに惹かれた私はその後も定期的に乗船し、これまで10回以上ピースボートクルーズに参加しています。国内外に友人も多くでき、それがまた旅を豊かなものにしてくれます。お勧めしたいのはピースボートならではの寄港地での交流ツアーで、普通のツアーとは異なる貴重な体験ができます。また船内イベントが多彩なことも魅力の一つ。夏祭りと運動会は参加者全員で盛り上がります。ピースボートでは知らなかった世界を知り、その土地の文化にふれ、そして世代や国籍を超えた友だちができます。まさに人生を変える出会いと体験があります。



森山太一さん・政子さん

寄港地で体験したことを、船内で出会い仲間になった人たちと語り合う経験もかけがえないものでした。

世界をこの目で見て、肌で感じ、 体験してきました

「船に乗って世界をまわり、さまざまな国の人々と出会い、つながり、そこを原点に平和をつくっていく」というピースボートの理念に関心があり、いつか乗船したいと思っていました。退職後、夫婦で叶えた世界一周は驚きと感動の連続でした。太平洋、大西洋、インド洋、海の色はすべて違う。特にイースター島では紺碧の海を背にモアイが守り神のように立っている風景は今でも心に焼きついています。また、マチュピチュでは降り続いていた雨が突然上がり、雲が切れて現れた遺跡群のすばらしさに感激しました。リオのカーニバルでは見学だけのつもりがいつしか妻と踊って飲んで、気が付いたら夜が明けていました(笑)。船内では、私は「スポーツ吹き矢」、妻は「健身気功」という自主企画を運営し、海外の方も含め大勢の方に参加いただきました。ピースボートは人生の糧となり、夫婦でリピーター参加したいと計画しています。(太一さん談)





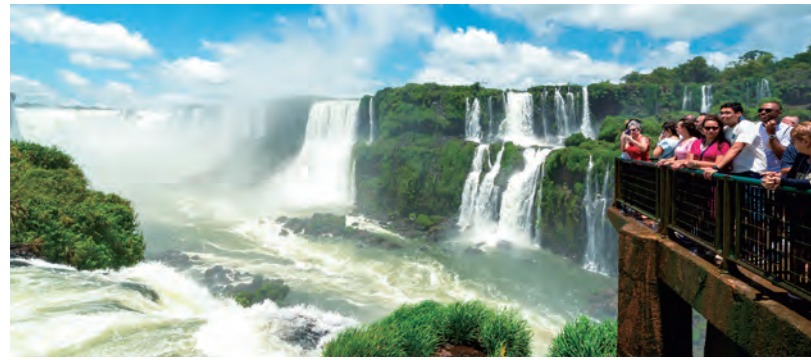
モン・サン・ミシェル
【フランス】

海に浮かぶように佇む修道院は、中世の面影を残す世界遺産です。潮の満ち引きで表情を変える幻想的な景観が魅力です。



ハーバード氷河
【アラスカ】

北米最大級の海洋氷河。海へせり出す巨大な氷河の姿は圧巻です。青白く輝く氷の世界が、アラスカの大自然を物語ります。



イグアスの滝
【アルゼンチン・ブラジル】

大小275もの滝が連なる世界最大級の大瀑布。轟音とともに流れ落ちる水の迫力は圧巻で、視界いっぱいに広がる水煙から自然の力強さを全身で感じられます。

マチュピチュ遺跡
【ペルー】

標高約2400メートルの山上に、雲海に浮かぶように現れるインカ帝国の空中都市。アンデスの壮大な山々に抱かれた精巧な遺跡群は、今なお多くの謎とロマンを秘めています。



南極

果てしなく続く氷の世界と静寂に包まれた、圧倒的なスケールの自然が広がっています。ペンギンやアザランが暮らす地球最後の秘境は、忘れられない感動を与えてくれます。



ソグネフィヨルド
【ノルウェー】

ノルウェー最大のフィヨルドは北欧を代表する絶景。切り立つ断崖と深い入り江からも自然の壮大さを実感できます。



ティカル遺跡
【グアテマラ】

ジャングルのなかに現れるマヤ文明の都市遺跡は太古の営みを想像させます。周囲の自然も含めて世界遺産です。



ラパヌイ国立公園
【チリ】

太平洋に浮かぶ孤島で、悠久の時を刻むモアイ像。遥かな歴史と神秘性が自然と調和する風景は、訪れる人を魅了します。



テーブルマウンテン
【南アフリカ共和国】

ケープタウンの街を見守る平らな山頂が特徴的な巨大な台地。見上げるその圧倒的な姿は爽快な絶景です。

一度は 見たい 世界の 絶景 10選

ピースボートスタッフが選ぶ

世界には、言葉を失うほど美しい景色があります。世界中を巡るピースボートの航路には、壮大な自然や悠久の歴史が織りなす絶景が数多く存在しています。数ある寄港地や訪問地のなかから、スタッフの心に深く刻まれた10の絶景をご紹介します。

オーロラ【アイスランド】

神秘の光のカーテン。刻々と表情を変える幻想的なオーロラは、自然が描く壮大なショー。一生に一度は見たい絶景です。



世界一周の 食卓を支える舞台裏

「毎日好きなものを選んで味も予想以上」「新鮮な野菜やフルーツがたっぷり食べられるのも嬉しい」そういった喜びの感想が多く寄せられるのがピースボートクルーズの自慢です。レストランのこだわりや工夫、ちょっとした裏話などを、船上の食を統括する担当者をご紹介します。



パシフィックワールド号
フード&ビバレッジマネージャー
戸島 あゆこ
TOJIMA Ayuko

調理師専門学校で基礎を学びホテルで研鑽を積む。2012年にジャパングレイス入社。歴代の船で厨房業務を経て現職。パシフィック・ワールド号料飲部門を統括。



すべてはお客さまの喜ぶ笑顔のために

「船の上で、これほど贅沢な料理に出会えるなんて―」お客さまからいただく驚きと喜びの声が、私たちの原動力です。ピースボートクルーズでは、約1000名の料理人が心を込めてお料理をプロデュースしています。そのこだわりは味だけにとどまりません。レストランの雰囲気や洗練されたサービス、美しい盛り付け、テーブルウェアに至るまで、すべてに最上質を追求しています。100日を超える航海を見据え、出航前から綿密なメニュー開発を実施。日本からの厳選食材と寄港地で調達する新鮮な食材を計画的に管理し、常に最高の品質を維持しています。和食・洋食・中華をはじめ、ビーガンやベジタリアンに対応したメニューも豊富にご用意。「毎日の食事が船旅の最大の楽しみになる―」そんな感動の食体験を目指し、一皿一皿に情熱を注いでいます。

世界基準が認めた 徹底した衛生管理



の安全性が世界最高水準で保たれている証拠です。この「絶対に安全である」という信頼感が、料理のおいしさを引き立てる土台となります。調理スタッフ全員が厳しいルールを遵守しながら、高度な衛生管理と、複雑で繊細な調理工程を両立できる厨房は、チームとしての組織力やオペレーション能力が極めて高いと言えます。このような

いつでも食べごろを 届ける鮮度へのこだわり

ビュッフェを彩るみずみずしいフルーツも、お客さまに人気があります。ピースボートクルーズ

の「食べごろ」を見極めて提供しています。サラダコーナーに常時10種類以上ならぶ生野菜も、採れたての新鮮さを味わっていただくには調理場に「出荷」するまでが重要です。野菜を保管する

「おいしさ」を支えているのは、ホテルマネージャーを中心とした妥協のない衛生管理体制です。パシフィック・ワールド号は、世界で最も厳格といわれるUSPH(米国公衆衛生局)の衛生検査において極めて高い評価を獲得。世界のクルーズ船ランキングでもトップ10入りを果たしています。これは、食品の保管温度、調理器具の殺菌、水源



プロフェッショナルな現場だからこそ、料理の味のクオリティもブレることなく、常に高いレベルで安定するのです。

進み具合で三段階に分けて仕入れを行い、最も香りと甘みが引き立つ「最高



ウォークイン冷蔵庫内で、徹底した仕分けと細かいケアを毎日実施し、ポジティブに鮮度を維持しています。見えない場所でありながらも、このこだわりこそが私たちの強みです。



特別な日におすすめ シェフズコレクション



記念日には、さらなる極上の選択肢をご用意。東京・日本橋の老舗「日山」から特別に提供いただいている極上霜降肉のすき焼きやステーキなど最高峰のプレミアムメニューが、洋上の時間をいっそう華やかに彩ります。



食事の時間が 待ち遠しくなる

船内では、その時の気分に合わせて自由なスタイルで食事をお楽しみいただけます。メインダイニングではフレンチスタイルのアラカルトをご用意。前菜からメイン、デザートまで豊富な選択肢があり、メニューは3日ごとに新しくなります。一方、もうひとつのレストランの朝は松花堂風の和食膳。小鉢や豆皿で味や水分が混ざらないよう工夫さ



※すし処「海」、シェフズコレクションは有料でのご提供となります。

日本の味を 堪能できる安心感

長期航海において、心がホッと和むのは慣れ親しんだ「本格的な和食」です。お客さまの繊細な味覚に応えるため、食材から器まで一切の妥協を許していません。お米は石川県の契約農家が育てたブランド米「ゆめみづほ」を使用。白米、玄米、お粥など好みに合わせて炊きわけています。梅干しや漬物、納豆など、日本の食卓に欠かせない定番の味はすべて横浜で積み込み、和食器には有田の美しい磁器を使用。海苔は有明海産を紙包装で用意するなど、細部まで和の情緒を大切にしています。この本格的な和食は、海外からのお客さまにも大好評です。



すし処「海」では、マイナス60度の超低温で最高の鮮度を保ったマグロをはじめ、厳選されたネタを「堪能いただけます。日本酒はお米と同じ石川県の吉田酒造「手取川」をご用意。ワイングラスに注ぐことで吟醸香をさらに深く味わえます。また、持続可能な漁業を支援する「MSC/ASC認証」をクルーズ船として世界で初めて取得。海の豊かさを未来へつなぐ、サステナブルな取り組みにも力を注いでいます。



支援の輪を未来へつなぐ



PBV15周年記念イベントを開催

東日本大震災をきっかけに誕生したピースボート災害支援センター（PBV）は、2026年に設立15周年を迎えました。4月5日、パシフィック・ワールド号で開催された記念イベントには約700名が参加。支援活動を支えてきた人々が集い、15年の歩みを振り返るとともに、これからの災害支援のあり方について考える一日となりました。



「公式サイト」<https://pbv.or.jp/>

15年の歩みを分かち合う特別な一日

会場となったパシフィック・ワールド号には、PBVの活動に関わってきた多くの人々が集まりました。これまで活動を支えてくださったボランティアや寄付者、災害支援サポーター、企業・団体、ネットワーク関係者の皆さま。そして共に困難を乗り越えてきた被災地の住民、行政、社会福祉協議会の皆さま。東日本大震災を原点に、全国各地で続けられてきた支援活動。その歩みにおいて築かれてきたつながりを確認し、多くの方々の支えと信頼のもとで活動を続けられていることを実感し感謝を伝える機会にもなりました。

支援の現場から生まれた「助け合いの連鎖」

イベントの中心となったトークセッションは2部構成で、1部では「15年の軌跡―東日本大震災から能登半島地震へ―」をテーマに、被災者、行政、社協の皆さまとともに「支援の現場で何が起き、どう乗り越えてきたか」を振り返りました。第2部では「災害支援の新たなステージへ―現場・組織・人をつなぐPBVの役割―」をテーマに、現場の声と多様な関係者の皆さまの



次の15年へ、支援を社会の力へ

た際の選択を疑似体験でき、来場者は展示を通して、自分自身や家族の防災について改めて考える機会を得ていました。また能登半島地震や奥能登豪雨への支援活動も紹介され、現在も続く支援の現状について理解を深める場となりました。子ども向けコーナーには多くの家族連れが訪れ、防災を楽しく学ぶ姿も見られました。

最後に、PBV代表理事山本隆氏の当日の挨拶を抜粋して紹介します。「人こそが人を支援できるということ。15年前の石巻から始まり、私たちが各地で何度も目にしてきたのは、かつて助けられた方が、次は誰かのために立ち上がるという、自然な助け合いの連鎖でした。この心の通い合いこそが、私たちの活動の原点です。私たちは今、この15年の経験を次の形にしていこうとしています。誰もが迷わず、迅速に助け合えるような『仕組みづくり』を強化していくこと。現場での経験を社会の仕組みに還元していくことが、次の15年に向けた私たちの責任だと考えています。誰かの隣に寄り添い、温かい食事を手渡し、共に明日を考える。その当たり前のような人間同士の関わりを積み上げていくことが、分断を乗り越え、世界を繋ぎ止める力になると信じています。15周年という節目に皆さまから『これからの災害支援』に向かう力をいただき、気持ちを新たに今後の活動を続けてまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします」

視点を交えながら、次の15年に向けた将来像を語り合いました。

音楽が届けた希望へのメッセージ

1部の最後には作曲家・吉俣良氏によるピアノ演奏も行われました。披露されたのは、東日本大震災復興支援舞台『イシノマキにいた時間』から生まれた楽曲「添歩み」（そゆみ）。静かに響く音色は、被災地への思いや支援活動の記憶を呼び起こし、多くの参加者が耳を傾けました。言葉だけでは伝えきれない感情や記憶を共有する時間は、支援活動の歩みを振り返るこの日の象徴的な場面となりました。

体験を通して考える災害への備え

会場には、PBVの活動を紹介する展示コーナーや体験型プログラムも設けられました。災害発生後の行動を考える体験展示では、「避難所へ行く」「在宅避難を選ぶ」など、実際に被災し



これからのピースボート 変わりゆく世界で、変わらないもの



ピースボート共同代表
吉岡 達也
YOSHIOKA Tatsuya

ピースボート創設メンバーで共同代表。ピース&グリーンボートの共同代表も務める。紛争予防国際ネットワーク「GPPAC」理事長。



異なる文化や価値観にふれ、人と人がつながり、未来について考えるきっかけを得ることも旅の大きな意味です。40年以上にわたり平和への思いを乗せて航海を続けるピースボート。その変わらない理念と、これから目指す未来について、共同代表の二人に聞きました。



ピースボート共同代表・国際部コーディネーター
畠山 澄子
HATAKEYAMA Sumiko

ケンブリッジ大学卒、ペンシルベニア大学大学院卒(博士・科学技術史)。おりづるプロジェクトや「地球大学」などを中心に、「顔の見える国際交流」を主軸に据えた船旅のコーディネートに携わる。TBS「サンデーモーニング」コメンテーター。

時代が変わっても変わらない、
ピースボートクルーズの
コアな魅力は何でしょうか

吉岡…ピースボートならではの体験と出会いというものが、加えて船上で一つのコミュニティができあがることだと思います。短期間のクルーズではなく、3カ月半になると単なる旅行仲間というレベルとは違う友情や人間関係が生まれます。

畠山…3カ月半という期間が絶妙で、最初から無理に距離を縮めなくてもよくて、共通体験を繰り返しながら価値観の合う人と自然に出会うことができます。また、世代や国籍問わずいろいろな人がいますから、「人間それぞれでいい」と思えるし「自分は自分のままでいい」という発見もできますね。さらに言うとうと肩書や立場といった世間一般の評価軸とは異なるフラットな関係が生まれます。船旅に参加されている皆さまが企画を手伝ってくれたり、船内運営を担うさまざまなチームに加わってくれたり。水先案内人の皆さんも、ボランティアで講座を開いてくださいます。ピースボートの船内でお互いのために何ができるのか、という意識が生まれていくのは一つの特徴だと思います。

吉岡…自分の持っているものを人と分かち合い、喜んでくれることを自らの喜びと感じる、人間の本质ですね。結局、それがなかったらピースボートは続かなかったと思う。40年以上続いてきた理由もそこにあると思います。

世界中で戦争や分断が
起きているなかで、国境を越えて
旅することにはどのような
意味がありますか

畠山…互いに理解し合うことではないでしょうか。たとえば船内で中国の方と話をするなかで、過去の戦争は過ちであつたという認識を共有でき、戦後日本の経済成長をリスペクトしていることを教わります。大切なのは、国という枠組みを超えて、目の前のひとりの「隣人」として良き関係を築いていくこと。そう思ったことで、私自身過去の振り返り方、未来の見え方がすっかりしました。また、東アジア各地から集う通訳ボランティアチームがあります。3カ月半寝食を共にすることで、「互いの相違について理解できた」「腹を割って話せる友人ができた」といった声を聞



きました。国際情勢がどれほど複雑であつても、個人はつながることができるのです。

吉岡…国境を越えた確かな信頼関係を築くことができれば、互いを傷つけ合うような選択には至らないはずです。そうした市民レベルの繋がりが社会の主流になつていくこそが、結果として平和を支える大きな礎になります。

この混迷の時代だからこそ、世界を旅し、対話を重ねることは必要なのです。
畠山…加えて私は地球の美しさそのものにふれることに意味があると思います。アラスカ、フィヨルド、南極、砂漠といった大自然にふれると感動とともに、地球を俯瞰することができます。大自然を前にすると人間は戦争や分断をしている場合ではなく、もっと大きな気候変動や海洋汚染といった地球課題に取り組むべきだと強く思うはずですよ。

吉岡…パシフィック・ワールド号の船体には文字通り「PEACE」のロゴを掲げています。世界へ向けて平和を発信しながら旅しているわけで、この船がどのような存在であるかというアイデンティティを示しています。またSDGsのマークを付けた世界で唯一の公式キャンペーン船でもあります。現在国連はその影響力が問われていますが、ピース



ボートがあれだけの大きな船にSDGsのマークを掲げながら、さまざまなアクションを起こしていることは国連に対するサポーターであるし、今の世界に必要なアプローチだと思っています。

二人が見据えるこれからの
ピースボートの挑戦について
教えてください

吉岡…今世界で起こっているさまざまな危機を直視しなければならぬし、そこでは「まだ諦めない」という気持ちも大切ですよ。私たちの活動で何かを変えていく、変わる可能性があることを信じながら、仲間と連携していきたい。だから国連とも、国際NGOとも、戦争被害者の方ともつながるし、そこからエネルギーを注いでいきたいです。非暴力で平和をつくることを訴えてきて、それが40年以上続いて、そのメッセンジャーであるピースボートクルーズに毎回大勢の方が乗船してくれる。そのこと自体が、私



たちが世界へ旅を続ける意義であり、次の時代への希望だと思っています。

畠山…あらゆる意味でより平和で、持続可能な世界を望む人にとつての、希望の灯をともし続けることがピースボートの存在意義だと思っています。人は簡単には分かり合えないというけれど、「この船を見てください、人々が共存しています」と言えるようでありたいと思っています。世界に対して悲観的になる人に、「そうではない、世界をもっと良くしていくことはできる」というモデルを、まずは船で示し続ける。それを中長期的には陸にも広げていくことがピースボートの



挑戦だと思っています。

吉岡…私たちは誰かに強制されているわけではないんです。知らない国に行くこととか、外国の人に会うとか、異なる文化にふれるとか、人間の好奇心を刺激してくれるから楽しいんです。楽しさが根本にあるし、人の力になったり、人が喜ぶことで人生が豊かになつていくんです。それが平和や持続可能な世界につながっていくのがピースボートのユニークさだと思います。

これから地球周を目指す方々へ
メッセージをお願いします

畠山…この地球(ほし)に生まれたのであれば、一度は世界をまわってみてその素晴らしさをぜひ体感して欲しいです。また、リアルな現実も自身の目で見て、肌で感じ、考えて欲しいと思います。

吉岡…世界一周できることは特別なチャンスだと思います。そのチャンスを掴んでください。皆さまにとつての新しい世界はすぐそこにあります。世界を見る勇氣をもつてピースボートにご乗船ください。

畠山…パシフィック・ワールド号でお待ちしています。📍

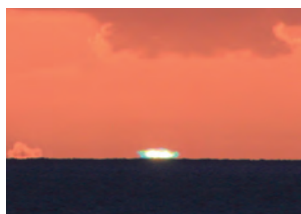
船上百景 [船上からの眺め]



静かな海面にキラキラと光りながら伸びていく白い航跡。



船上という特等席から望む日の出。



幸せを呼ぶ奇跡の一閃「グリーンフラッシュ」。

船旅には刻一刻表情を変える 景色を楽しむ至福があります

「目的地へ向かう時間そのものを楽しむ」
そこそこが船旅の贅沢です。窓やデッキから
海と空を眺める時間もそのひとつ。朝早く起
きれば、朝日が海面を黄金色に染め、新しい
一日の始まりを告げてくれます。昼には青い海
に風が描く波紋がきらめき、船が進むたびに
白い航跡がゆつくりと後方へ伸びていくでし
ょう。そして夕暮れには、水平線へと沈む夕陽が
空と海を茜色に染め上げ、誰もが思わず足を
止めます。息をのむような朝日や夕陽を、毎日
欠かさず写真に残す人も少なくありません。
どこかへ急ぐ必要のない船旅だから景色に
心をゆだねる余裕が生まれます。風の強さや
雲の形、海の色は刻々と変わり、航跡や波紋も
二つとして同じ景色はありません。だからこ
そ、その一瞬一瞬が心に刻まれ、色あせない思
い出となっていくのです。

「人間は、陸の上では自らの足で歩かねばならぬが、海の上では船が彼らの翼となる」。これは古代ギリシャの哲学者の言葉です。人類が最初の丸木舟を作ってから8000年。風まかせではなく動力を駆使し、自由に移動できるようになってから2000年。そして、世界を巡る「旅行としての船旅の時代」となったのは50年前。この50年は、8000年の船旅の歴史において、全体のわずか0・6%という一瞬です。

人類が命がけで海を渡り続けたのは、二つの場所での「孤立」を恐れ、まだ見ぬ他者と「出会い」つながるため。それが未来へ命をつなぐ生存戦略だったからです。現代は、どこにいても誰かとつながれるようになって、実は最も心が孤立しやすい時代。だからこそ、運よくこの黄金期に生きる人間として自らの意志で船に乗り、新たな出会いに身を投じることは、歴史を紡いだ航海者たちと変わらない根源的な価値があるのでしょうか。

船旅での出会いは、「長い歴史」の縦軸と「広い世界」の横軸が交差した瞬間にだけ生まれる奇跡の結び目です。大河のような歴史の先端に立つ私たちが、その翼を広げずにいるのはあまりにももったいない。さあ、本能のままに新しい世界へ、大いなる航海を――。(井上・編集部)

